

市原市ヤジ山遺跡第2 黒色帯中の石器群

村木正記

はじめに

平成二年の夏は記録的な猛暑が列島を席卷した。この暑さを衝いて東関東自動車道の発掘調査は遂行されていたが、旧石器時代の深掘調査を実施していたヤジ山遺跡の状況にはひとときわ厳しいものがあった。これは、下層確認調査へのクラムシェル導入の一契機ともなったが、第2 黒色帯中に明瞭な上下差をもつ石器群を検出するという成果を挙げることができた。本格的な整理事業は、平成4年度以降となるため、ここではいくつかの資料を紹介し、本遺跡の重要性の一端を指摘するに止めたい。尚、本稿の作成にあたっては、東関東市原事務所の同僚から種々のご援助とご指導を賜つ

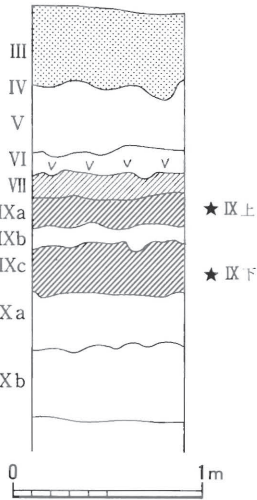
た。銘記し、謝意を表したい。

1. 位置と土層

ヤジ山遺跡は養老川と小櫃川とに挟まれた下総台地上に位置する。下総台地は埼玉県久喜市周辺を頂点とし、北西から南東に軸心をもつ北低南高の構造をもつが、本遺跡周辺での標高は67メートル前後に達し、次第に丘陵的景観をみせるようになる。現在、遺跡の南側には、深城の集落から北上し、椎津川に合流する深い谷が認められ、遺跡の乗る台地平坦面とは急斜面によって境界されている。また、北側にも埋積の進んだ浅い谷が看取される。後期旧石器時代前半の遺物集中地点が多



第1図 遺跡の位置



第2図 土層

く検出された地点は、南側の急斜面に沿っており、包含層の一部は浸食作用によって失われた可能性もある。遺跡周辺の現況は畑地と山林であり、深城スイカの産地として知られている。夏の暑い日盛りに食べたスイカの美味しさは、記憶に新しい。

ローム層の堆積状況は下総台地西縁部の典型的な様相を示している(第2図)。表土層下に縄文早期子母口式の良好な包含層があり、遺構を伴う。以下、ローム層に移行するが、その層序は萱田地区での分層結果によく一致し、それが地域的普遍性を有するものであることを示唆しており、広域的な詳細な層準対比をも可能にしている。従って、以下の土層の呼称法に関しては、萱田地区のそれを援用したい。また、詳細な記載は省略したい。

2. 分布と産出層準

ヤジ山遺跡の調査に際しては、いくつかの地点から旧石器時代の遺物が検出されている。その全貌は本報告に委ねることとし、今回の紹介は、それらのうち第2黒色帯検出のものに限定しよう。

石器群の垂直分布を検討した結果、石器群は第2黒色帯下部暗色帯下層(IX_c層相当)のグループと第2黒色帯下部暗色帯上層(IX_a層相当)のグループとに二分された。前者をIX_上層石器群、後者をIX_下層石器群とする。両者間のレベル差は明瞭であり、また、分布域も異なっているため、ほぼ完全な分離が可能である。第3図に当該石器群の分布状況を示した。

IX_下石器群 2箇所の集中地点がある。両者は南

北に並存し、その集中度も高い。北側のものをIX_{下a}集中とし、南をIX_{下b}集中とする。集中地点には多量の黒曜石の剥片、削片類や石核等が認められるので、2種の母岩を対象とする一般的母岩消費地点との規定が妥当であるが、それらと共に石刃が搬入されている。特にIX_{下b}集中の南縁に石刃の散布が濃い。また、作出された剥片の一部に使用痕が著明であるので、廃棄を含む諸種の行動が比較的限定されたエリアを中心に反復された可能性が高い。

IX_上石器群 4箇所の集中地点がある。各集中地点は台地縁辺部に東西に並存する傾向が看取される。これを西から東に向かってそれぞれIX_{上a}~IX_{上d}集中とする。IX_{上a}集中は良質のチョコレート頁岩と黒曜石の剥片・削片を主体としているが、それは比較的少量であり、また、明瞭な使用痕の認められる資料が少ない。母岩の限定的消費、石器製作・再生過程を背景とする廃棄地点としての性格が濃い。IX_{上b}集中は粗悪なチャートの破砕片が主体を占めている。IX_{上c}・d集中は資料数が少ない。IX_{上a}集中と近似した構成を示しているようにも見えるが、詳細な分析をまわって性格を究明したい。

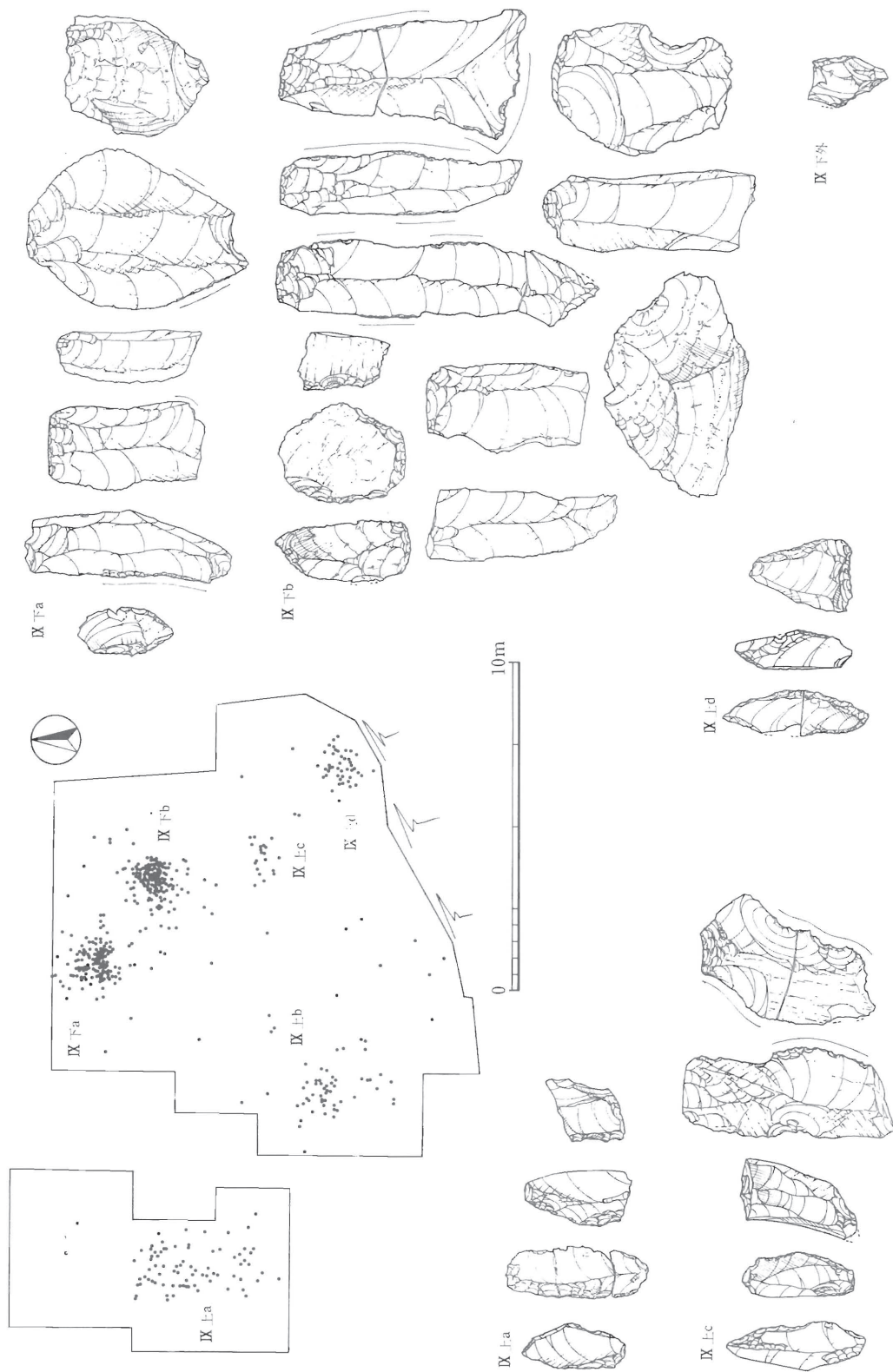
3. IX_下石器群の遺物

第4図~第6図に資料の一部を示した。以下の記載には各資料に付した番号を使用する。それぞれの遺物の集中地点への帰属に関しては第3図を参照のこと。

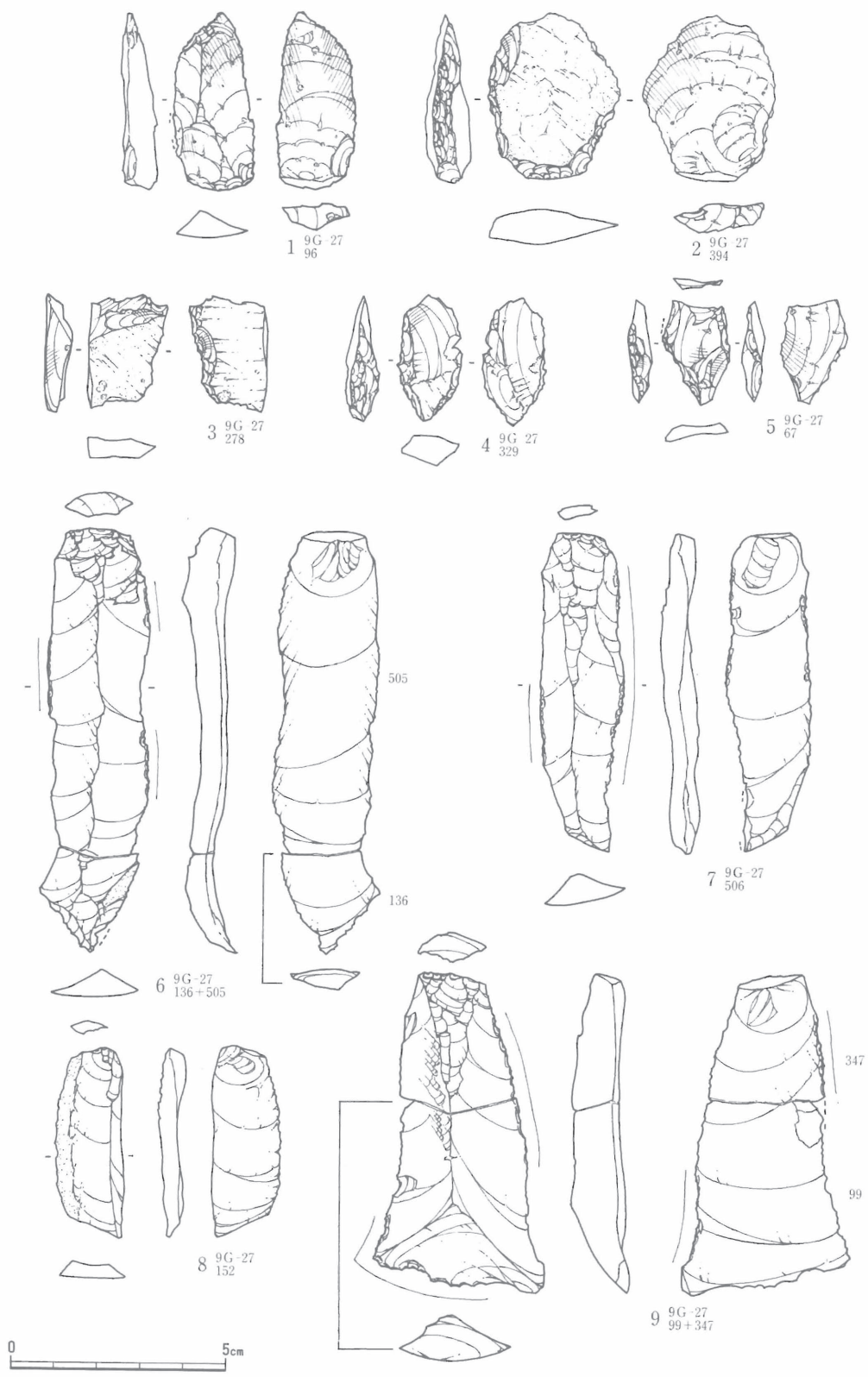
(1) 基部加工ある縦長尖頭剥片(1) 縦長剥片の基部両側に簡略な二次加工が錯向的に加えられている。素材こそ異にするが、本層準に頻出する基部加工尖頭石刃の仲間と見られる。黒曜石製であるが、素材剥片は地点内で作出されている。

(2) 台形石器(2・3) 2は1と同一母岩の黒曜石製。原礫面に被覆された幅広の剥片の2側縁に細部加工が認められる。とくに背面左側縁のブランディングは精緻である。3も多分同一母岩であろう。剥片を折り取って、片側にのみ角度の浅い調整剝離を加えている。刃部はやや不規則であるが鋭利である。

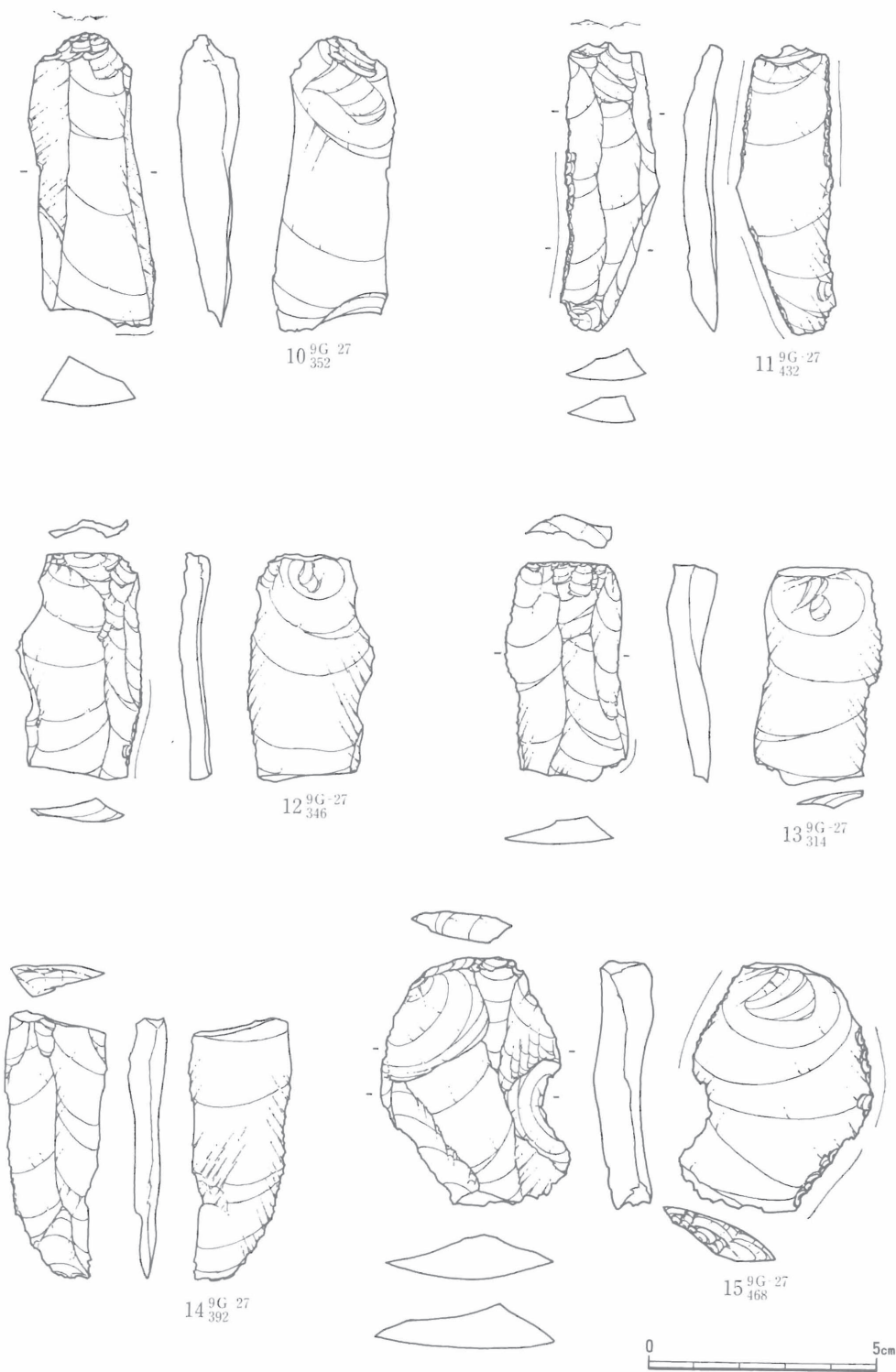
(3) 剥片製小型ナイフ形石器(4・5) おそらく両例とも1~3と同一の母岩であろう。不定形・横長の剥片の一側縁(4)、二側縁(5)に細部加工



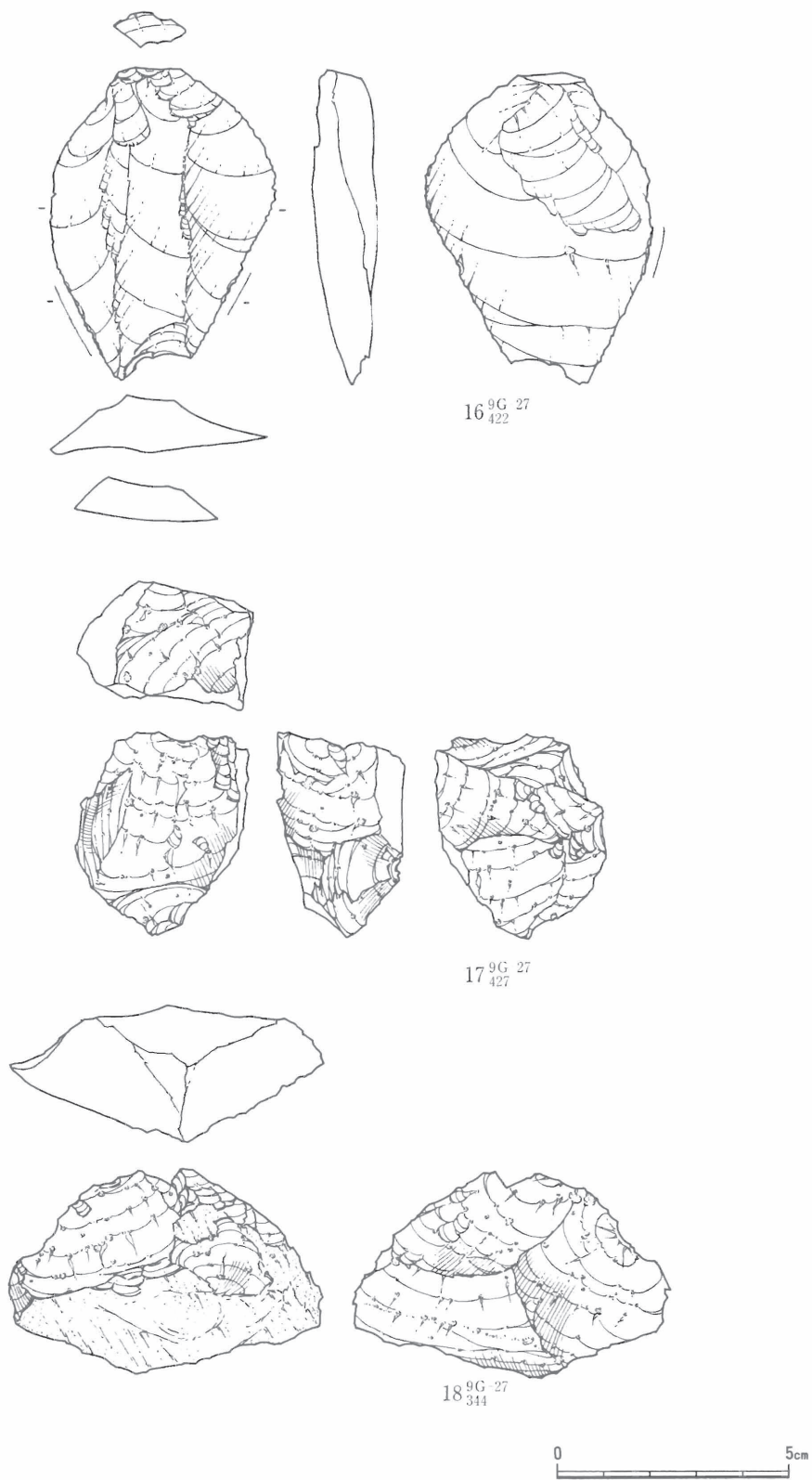
第3図 遺物の分布状況



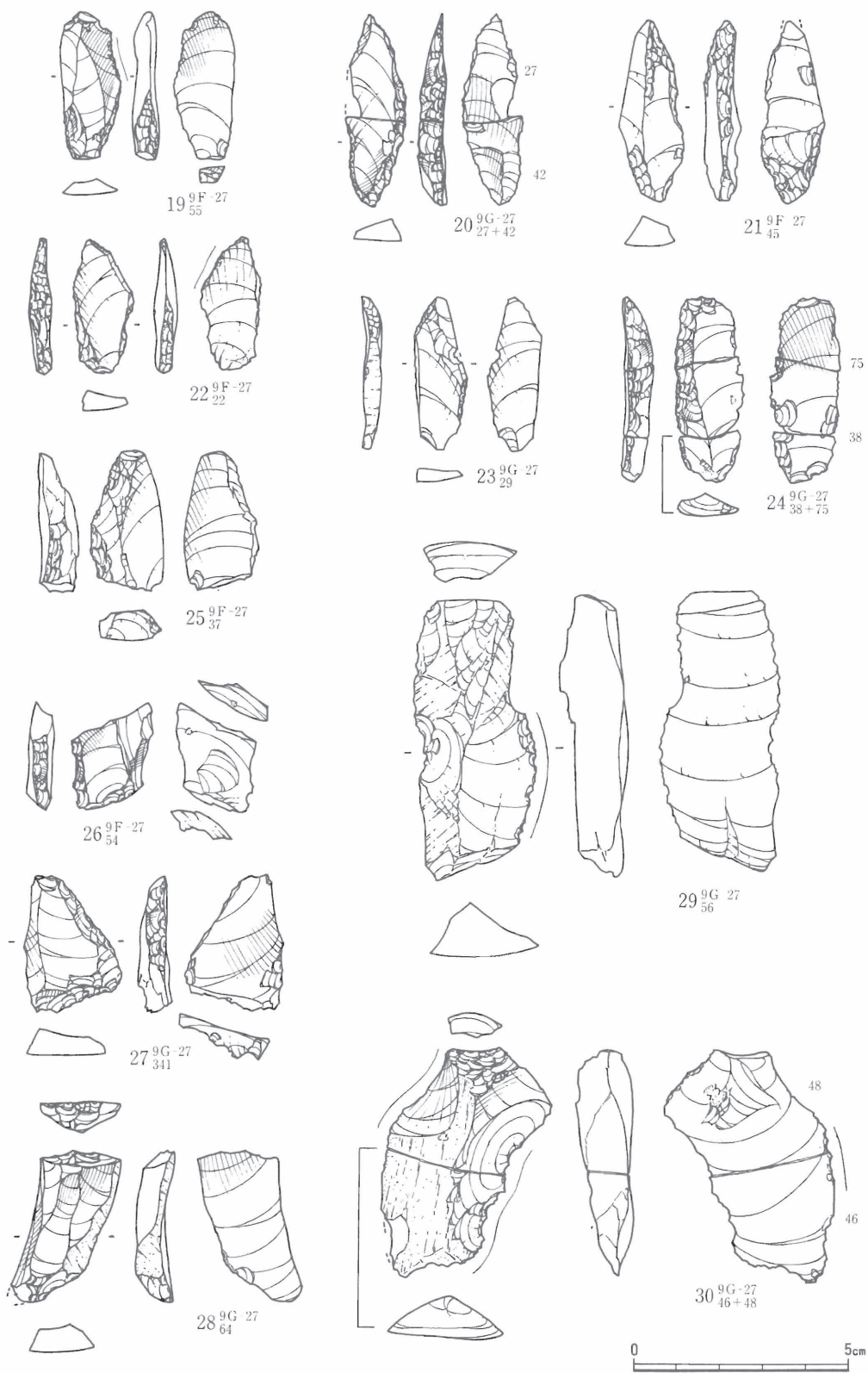
第4図 出土遺物(1)(IX下層)



第5図 出土遺物2 (IX下層)



第 6 図 出土遺物 3 (IX 下層)



第7図 出土遺物4 (IX上層)

が観察される。

(4) 石刃 (6~14) 石刃には黒曜石製のものは一例もなく、

珪質頁岩	6・12・14
流紋岩	7・8 (同一母岩)
珪化凝灰岩	9・10 (9・10同一母岩)・11・12・13

という三様の石材を選択的に使用している。石刃には大小の差があるが、非調整の平坦打面をもつやや粗製のものが多い。全て遺跡外からの搬入品であるため、細かい剝離技術を知ることは困難であるが、石核の側面調整、とくに稜形成の横位調整痕は認められず、打面を固定し、連続的に先細りの形態をした石刃を生産しているらしい。ただし、頭部調整は顕著であり、大体のものに観察される。サイズ・形状・石材等は栃木県磯山遺跡の例に極めて近いであろう。

(5) 使用痕付きの剝片 (15・16) 黒曜石製のものも多いが、ここでは石刃生産に随伴して生じる剝片を示した。15は珪化凝灰岩製、16が珪質頁岩製。これらの諸例が示すように、石刃生産に際して生じる剝片類のうち、一部は選択的に石刃と共に旅立つ。

(6) 石核 (17・18) 本遺跡内で一般的消費に従った黒曜石の剝離技法を如実に示す石核2例を示す。両例は同一母岩であり、1~5の素材を供給したものである。あえて贅言を費やすまでもなく、17は賽子状の例であり、18は典型的な盤状横打石核に分類される。おそらく、1は前者から、2は後者から作出された剝片を素材としているものと見られる。

4. IX上石器群の遺物

(1) ナイフ形石器 (19~26) 小型の有背尖頭刃器をナイフ形石器と定義したい。これらは以下の如く分類される。

a類 (19) 小型の石刃、あるいは整った縦長剝片の打面部基部両側縁にブランティングを加えるもの。打面は残置される。

b類 (20・21・22) 小型の石刃、あるいは縦長剝片のを素材とし、二側縁にブランティングを施すもの。打面部と基部を一致させる。一例ではあるが、裏面基部加工の顕著なものがある(21)。20にも腹面に器体長軸に沿った剝離痕があるが、

企図的なものかどうかははっきりしない。ただし、同趣の剝離痕は23にも看取される。

c類 (23) 小型の石刃、あるいは縦長剝片を素材とし、側縁部の一部にブランティングを施すもの。基部と打面の位置関係はa・b類に等しい。

d類 (24) 小型の石刃、あるいは縦長剝片を素材とし一側縁にブランティングを施すもの。25・26の両例は破損しているが、たぶん本類に帰属しよう。24例は二次的な剝離痕が全周にわたって顕著であり、ヘヴィーな使用が想定される。

(2) 截頂石刃 (27・28) 小型の石刃、あるいは整った縦長剝片の端部を截断するもの。27では斜断し、28では水平に截断している。28には尾部側にも細部加工があり、あるいは端削器なのかもしれない。

(3) 使用痕付きの剝片 (29・30) 29はチョコレート頁岩製の石刃状のもので、細かい刃こぼれが著しい。30は良質の黒曜石の剝片で、背面右側縁に剝離痕をとどめており、本来石核として機能していたらしい。刃こぼれとともに線状痕が観察される。

5. まとめ

すでに与えられた紙数が尽きかかっており、十分なまとめは不可能である。われわれはここ十年ほどの間、第2黒色帯中石器群の詳細な編年を組み上げてきたが、本石器群はそれに大きく寄与するものであろう。

ヤジ山遺跡においては確認された石器群の重複関係は、基本的に中山新田I石器群から荒久下層石器群への変遷に対応するものと理解してよいであろう。前者に関しては本年度ヤジ山遺跡に近接する細山遺跡から良好な資料が追加されているが、ここでは局部磨製石斧に基部加工尖頭石刃が伴っており、上総方面における該期の情勢が次第に明らかになれつつある。一方、後者については、近年複雑な石器群の様相が顕在化しつつあり、自然層位に包含される特定石器を示準化石とする硬直的編年観は一挙に瓦解しつつある。このような趨勢に本遺跡の石器群は再び一石を投じよう。